

タンザニア事務所から ひとこと

タンザニアは新生児、乳児および妊産婦の死亡率が高い国です。そのため専門家の母子保健技術の向上や、母親への母子保健に関する指導、思春期の子どもたちへのリプロダクティブ・ヘルスの啓発が必要とされています。由利さんは母子保健の関係者と信頼関係を築きながら活動を続け、地域のお母さんや子どもたちから愛された存在でした。



企画調査員(ボランティア事業)\*  
由利 紗織(つじもと・まこと)

\*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査して要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。

+one information

活気があふれる魚市場

私が赴任していたバガモヨはインド洋に面した地域です。地元の人たちは、朝は海から昇る朝日を浴びて波の音を聞きながら散歩し、夜は月明かりの下でのんびり過ごします。海辺では祝日になると何かしらのイベントが開催され、とくに音楽や踊りのイベントであるバガモヨ・フェスティバルは多くの人でにぎわいます。海上に浮かぶたくさんのダウ船\*や街に残る奴隷貿易時代の痕跡など興味は尽きません。

そんなバガモヨの生活で欠かせないのが魚市場です。漁業が盛んなこの地域では、水揚げされた新鮮な魚介類は港の市場に並び、そこで競りが始まります。商人だけでなく地元の人たちも参加するため、私の同僚も競りの時間に合わせてよく仕事を早退して参加しました。魚市場にはアフリカのカラフルな布をまとった多くの女性が集まり、鮮やかな光景が広がります。

待ちに待った漁船が港に着くと魚市場は一気に活気があふれます。タイやマグロ、くちばしの長い魚、深海魚のような顔の魚、タコやイカをはじめさまざまな海産物が市場にずらりと並びます。魚をさばくことを業としている人もいて、お客が魚を買った後「俺がさばく」「いや、俺の客だ。俺がさばく」と客の取り合いになるので気が抜けません。

そんなやりとりを横目に少し歩けば、砂浜が広がっています。そこにはやかんに入ったコーヒーやピーナッツでできた「きなこ棒」のようなお菓子、ゆで卵を売っている男の子たちの姿も。そのへんに座って海を眺めながら友人と過ごした穏やかな時間が懐かしく思い出されます。(由利紗織)

\*古代から現在までアラビア海・インド洋で活躍している伝統的な木造帆船で、大きな三角帆が特徴。



イラスト●さかがわ成美



初めて知ることが  
たくさんあるね

若年妊娠についてスワヒリ語で書かれた絵本を使った授業の様子。

JICA海外協力隊の大学連携とは？

現地での活動支援を充実させるために特定の大学の専門性・知見を活用し、大学側の組織的バックアップ(教員、委員会からの指導など)のもと、大学生や大学院生らを派遣する制度。

- 覚書を交わした大学数: 28大学
- 派遣者数累計(長期・短期含む): 960名
- \*2020年3月末時点

詳しくは  
こちらから



最近の体調は  
どうですか？



右: 中学校で行った命をテーマにした授業内で妊婦体験を実施。  
左: 巡回がない日は、保健局に併設された県立病院で妊婦健診を行う。

活動を続けていくうちに、街中でも、子どもたちから学校で受けたワクチンについて聞かれたり、妊婦さんやお母さんから出産と避妊に関する質問をされたりすることが増えました。地域の人たちが健康に興味を持つようになり、学校と病院の橋渡しができたと感じうれしかったです。

現在、私は日本の看護大学で教員をしています。これからは未来の看護師や助産師たちに私の経験を伝えていきたいと思っています。

\*性生殖に関する健康と権利について学ぶ教育のこと。

私は漁師町のバガモヨに赴任し、保健施設と小・中学校を巡回して保健衛生や環境に関する調査や指導を行ったり、ワクチン接種に同行したりしました。そこで気がついたのは、ものが「ない」のではなく、ものの「使い方」に問題があるということでした。たとえば、冷蔵庫に薬剤が保管してあっても適切な温度管理ができていないところは限られます。薬剤を提供するだけでなく、管理方法をしっかり伝えていくことも必要だと感じました。

さらに今回の活動で重要だったのが、小・中学校で行うリプロダクティブ・ヘルス教育の改善です。タンザニアの妊産婦死亡率は日本の約100倍と高く、その要因には危険な中絶や10代の若年妊娠が含まれます。また日本の場合、生徒が妊娠を理由に退学しても復学できる可能性がありますが、現在の国では二度と学校に戻れません。バガモヨの小学校だけでも年間3〜5人の女の子が妊娠を理由に退学し、学ぶ機会を奪われています。そこで学校の教員や、県庁保健課と教育課の職員たちと話し合い、生徒が体験から学べる教育を実施しました。なかでも水のボトルとアフリカの布で作った妊婦体験ジャケットの授業や、若年妊娠がテーマの絵本を題材とした劇を取り入れた授業は好評でした。

総合病院で12年ほど助産師として勤務した後、聖路加国際大学院看護学研究科に入学しました。大学院への進学を検討しているときに、タンザニアの母子保健分野の医療サービス向上を目的とした聖路加国際大学とJICAによる大学連携の派遣隊員制度を知り応募しました。病院勤務で母子に寄り添ってきた経験を生かせると思ったからです。

自分自身の健康に興味を持つことの大切さを伝えました



JICA海外協力隊  
がゆく Vol. 20

助産師の経験を生かし、タンザニアで母子保健に関する活動に従事した隊員を紹介します。

構成●坪根育美

in タンザニア  
由利 紗織

ゆり・さおり  
出身地: 秋田県 職種: 看護師  
任期: 2018年1月~2019年9月



自分自身の健康に興味を持つことの大切さを伝えました